

第17話 平家の都落ち

よしなか 義仲が北国から京都に迫ると、むねもり あんとく 宗盛は安徳天皇を奉じて遠く九州に奔る。はし

平家の狼狽

先にも述べたように、じゆえい 寿永2年4月17日に平家が北国へ向って都を出た時には、どうどう 堂々たる100,000余騎の大軍で、これを食い止めるものなどは逆もありそうに見えなかったが、わづか 僅か1ヶ月半余りを隔てたばかりの今、6月上旬に都に帰って来たものといっただけはただ30,000余騎に過ぎなかった。それも多くは馬にも乗らず、よろい す 鎧も捨てて、うちしおたれた落武者となつて、おちむしや ある ほっこく うらづた 或いは北国の浦伝いに、或いはとうさんどう やま 東山道の山づた 伝えに、ちりぢりばらばらに、ほうほうの体で逃げ帰ったのです。

6月の初めに、このはいほう 敗報が京都に伝わった時の平家のおどろ 驚きようはなかった。実際、今度の戦いにはひっしょう き 必勝を期していたので、すう つく 数を尽して出してしまったので、今、こう 斯う討たれてしまつては、よび 予備の兵としても無かつたのです。

僧兵もまた敵となる

そういううちにも、よしなか ぐんぜい 義仲の軍勢は東山、北陸のりょうどう 両道から京都に攻上つて、6月の中旬には、北陸道のせんじん すで えちぜん こくふ たけふ 先陣は既に越前の国府 - 今の武生町 - に着いたという知らせがあつた。平家は今は逆も源氏を防ぐ力が無かつたので、そうへい か 僧兵の力を借ろうと思つたが、既にすで みいでら こうふくじ 三井寺と奈良の興福寺とは敵にしてしまつたので、せめてはひえいざん えんりやくじ 比叡山の延暦寺だけでも身方にしようと、非常にしたで で こうしょう 下手に出たその交渉をした。ところが、すで よしなか 延暦寺では既に義仲の方から交渉を受けて、源氏に身方することに決めて居たので、平家には返事もしなかつた。

平家はいよいよ法がつかなくなつた。むねもり ひとま 宗盛は一門の人々を集めて、一先づ天皇及び法皇を奉じてさいごく お 西国に落ちようと言ひ出した。このそうだん あま いくじ 相談を、余りに意気地のない事に思つた者らは、いまさら みれん 今更そんな未練がましい事をするよりも、たとえどうなるろうとも、都でさいご ふせ たたか 最後まで防ぎ戦おうと主張した。しかし、むねもり したが 宗盛は従おうとはしなかつたのです。

義仲が京都に迫る

間もなく、よしなか 義仲が比叡山に登つて、そうと いっしょ 延暦寺の僧徒と一緒になつたという知らせが来た。続いて、源氏の一軍は東近江をまわつてせた 勢多から進み、又、一軍はたんばち うち いが 丹波路にまわり、宇治から伊賀をまわつた行家の一軍が進んで来るという知らせが来た。平家は小勢で、しかもその大部分は戦おうという意思もきりよく 気力もない者共なので、それが今にも源氏にとりま 取り巻かれて、ふちゆう うを 釜中の魚となつてしまつているのであります。

実際、ぐづぐづしてはいられなかつた。むねもり 宗盛はいよいよ予定の計画通り、安徳天皇及び後白河法皇を奉じてくだ 西国に下ることにして、7月24の夜、明日は早くともつば 専らその用意を急がせていると、その夜中過ぎに、わづ 法皇は僅かのお供をつれられて、こっそりと院の御所を抜け出しになり、くらまち よしなか 鞍馬路をまわつて義仲のいるえんりやくじ 延暦寺においでになつた。平家がひさ 久しく悪逆をほしいままにしていた上に、今また、その武力

第17話 平家の都落ち

の頼むに足りないことを腑甲斐なく思われたのでしよう。

平家、西国に向う

この事を宗盛は後で知っていよいよ狼狽した。天皇と法皇とを奉じてこそ、敵を皆朝敵とみることが出来るのに、今は法皇にまで棄てられたかと思うと、全く落胆したが、せめてはと、その翌25日の早朝に、天皇及び御母の建礼門院、並びに三種の神器を奉じて、六波羅や西八条の邸には火をかけ、一族郎党、相率いて、都を後に落ちて行った。

久しくわが儘の限りを尽して、人を人とも思わなかった報いが来たのだと思えば、平家としては当然なことなのですが、僅かに御年6才の安徳天皇が、平家とのご縁が深い為とはいえ、帝都を後に落ちられる事になったのは、誠にいたわしい次第であります。

平家は、その日は福原まで行って一夜を過ごし、その翌日に、先年、ここに造った内裏を始め、清盛の別荘やその他一切の邸宅を焼き払って、そこから船に乗って、遠く九州の大宰府をさして落ちて行きました。

(第17話 平家の都落ち 終わり。 次は前頁に戻り、 第18話 源氏の同士討ち へ)